

外国語はいい高等学校では英語以外にフランス語またはドイツ語をほんの少しばかりだがとにかく教えるそうである。しかしカセツェート大学では英語一本槍である。一般的にいて、日本の学生にくらべて会話はできるようだが、読解力はあまりよくないようである。たとえば大学の1、2年生用の英語の教科書は語いを1000語に限られたものである。出版物の少ないのは低開発国の常であるが、ここでもその例に洩れず、タイ語で書かれた大学の教科書、専門書は講義プリント以外はなく、洋書の高価なこととあいまって、この英語読書力の不足が大部分の学生達にとって大きな障害になっているように見受けられる。

学生達の日常生活は概して規則正しい。出席をとられるせいもあるが、さぼる学生はあまりない。また大部分の学生は経済的にあまり余裕がなく、平均400バーツ（約7～8千円）で1カ月を暮している。したがって、そういうわけでもないのだろうが、学生達のスポーツ、娯楽などはもっぱらキャンパス内が多いようだ。母校愛、上級生、下級生の折り目はかなり強く、学生自治会は政治活動を全然しない。大学内の秩序を守り、学生達のよりよい精神的、肉体的環境をつくりだすのに相当役立っている。たとえば、種々の学内行事を企画したり、出版を行ったり、売店を経営したり、ときには品行のよくない学生を懲罰の意味で川水路にほうりこんだりする。それだけに、学生達が町へ出掛けたりするときは服装もきちんとし、一般に

対する模範を示そうという気持が見られる。たとえば乗物の中で率先して席をゆずったり、酔っ払いを食堂からつまみだしたりというようなことをよく経験する。

このように学生々活は日本のにくらべ、色々な面で随分きちんとしたもので、少し窮屈気味なところもあるが、そのなかでも何といっても一番大きいのは落第、中退制度である。入学した学生の半数近くが5年間に落伍してしまう。上級生が尊敬を受けるのもあながち理由のないことではない。そして残った半数の精鋭達が晴れの学位授与式に臨み、ガウンをつけ四角の帽子をかぶって、国王陛下でずから学位記を拝受することになる。

1942年カセツェート大学発足以来の卒業生総数は、男1,751名、女248名の合計2,009名にすぎない。このうちの95%が農務省を主とするタイ国政府官吏、3%が民間企業（主として外国会社のバンコク支店など）、残りの2%が自家の農場主となっている。

カセツェート大学がタイ国唯一の農科大学であることや、その卒業生の就職状況、大学の発展の経緯などから分るように、タイの農業を将来どうやっていくかという大問題が、まず大学の自治、学問の自由を云々する以前のものとして立ちはだかつており、その意味では種々の欠点は多々あっても、全体としては、その方向に向かってとにかく人材を送り出していると云えよう。

エール大学だより

酒井敏明

ペンシルヴァニア州ルイスバークのバックネル大学で約2カ月の予備講習を受け、去年の9月はじめにニュー・ヘヴンに着きました。その後の4カ月間の見聞を簡単に記します。

ご承知のように、エール大学はハーヴァード大学とならんで、アメリカとしては早くから外国研究を精力的に進めて来た大学の一つで、伝統ある名門であることはいうまでもありません。1841年にアメリカで最初

のサンスクリット語の教授が任命されたのはエールでありますし、その後主として言語、歴史、人類、地理の分野で、非西洋諸国の研究が進められて来ました。特に外国語教育の面では、外国人教師によるインテンシヴなオーラル・メソッドというべきエール・メソッドが確立され、第二次大戦によって急に大きな需要ができたためでしょうが、極東言語研究所（IFEL）が誕生しました。東および南アジア言語文学、スラヴ言

語文学、言語学の3学科も戦後にできたようです。現在 International Studies としては、African Studies, East Asian Studies, Latin American Studies, Russian and East European Studies, Southeast Asian Studies の5つのプログラムがあります。

Southeast Asia Studies は1947年アメリカでは最初に設立されました。Raymond Kennedy, John F. Embree などの人類学の大きな業績が重きをなしていたのですが、その後着実に発展し、1959年以来言語および地域センターとして、政府の補助金も大変多いようです。現在、評議員会議長は Karl J. Pelzer 氏、副議長は Harry J. Benda 氏、教授は言語学、人類学などとの兼任ですが8人、準教授から講師までが9人というスタッフです。今年度開講されているコースは10、プログラム独自のものは少なく、多くは他の学科との共通講義です。言語はインドネシア語、タガログ語、ビルマ語、タイ語、ヴェトナム語の5つ（マラヨポリネシア語は休講）が教育されています。

Southeast Asia Studies は修士課程をもち、discipline を4コース、area を2コース、言語を上級まで履習した学生がM.A.を与えられます。言語は初級、中級、上級の3コースに分かれていますから、入学前の夏期休暇中に IFEL で開かれる2カ月の集中講習に参加して、初級を終えておかないと、2年で修了することはできません。Ph. D. は地理学、政治学などの学科に籍を置き、その学科で取得するという形です。今年は修士課程12人、Ph. D. candidates は7人、他に私もその1人である special students が3人います。

今年のコースを次に記します。

Karl J. Pelzer, Geography of Southeast Asia.
Harold C. Conklin, Language, Culture and Society in the Philippines.

David N. Rowe, Problems in the International Relations of East Asia, Southeast Asia, and the Pacific.

Paul Mus, Brahmanism and Buddhism—The Background of Indian Thought.

Harry J. Benda, The History of Southeast Asia since 1500.

Harry J. Benda, Problems in the History of Modern Southeast Asia.

Nelson I. Wu, The Art of Eastern and Southern Asia.

David N. Rowe, The Governments and Politics of East, Southeast and South Asia.

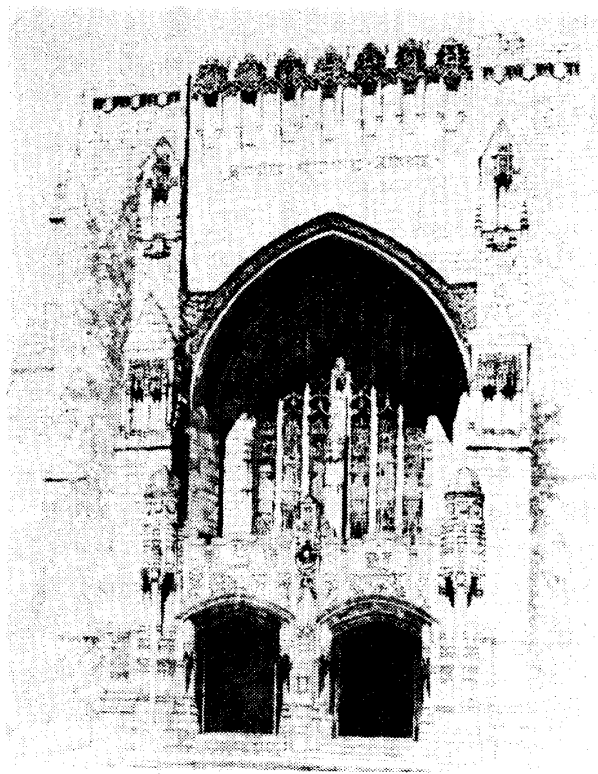
Leopold J. Pospisil, Ethnology of Papua and Australia.

Jacques Barrau, Man and Plants in Tropical Oceania.

はじめの4つは前期で終了、最後の2つは後期から、残りは通年の講義です。

このうち私がとっているのは Pelzer 氏の地理だけで、他の講義の内容をお伝えすることはできません。Benda 氏の歴史は学生間のになかなか人気があるようです。Pelzer 氏のクラスは受講生12人ほど、他の講義と同じく、Southeast Asia Studies または地理以外を専攻する学生も受講しています。東南アジアの自然、文化、経済、政治の概念を与えるのが目的で、去年出版された Charles A. Fisher の Southeast Asia を教科書に指定し、他に、地形、気候、土壌、植生、民族などの主題ごとに、いわゆる reading assignment がたくさん指定されます。毎週月曜日の午後2時間 Pelzer 氏が各主題ごとに講義するのですが、一定時間内に多くの内容を語らねばならぬからですが、ほとんど休む暇なしに語り続けるという調子です。特に後半、農業を主とする経済生活を述べる段になると、戦前フィリピンと蘭印の農業開拓を実地調査した経験があり、多年の蓄積がある氏の専門分野でありますから、講義にますます熱が入り、うまずたゆまず語り続けるという趣きがありました。それでいて、学生の比較的つまらない質問に対しても、懇切に答えるという態度があり、限られた時間数ではありますがなかなか充実した内容があったと思います。他の講義もみな週2時間または3時間であり、指定参考書や論文が多いこと、学期末に試験があり、レポートを提出させることなど、共通しているようです。

言語教育については、先にあげた5つの言語、それぞれ初級は週9時間、中級6時間、上級3時間の時間数が割り当てられ、外国人教師が教えています。私はビルマ語初級を選択していますが、先生2人に学生1人という変ったクラスです。Cornyn 氏の Spoken



エール大学スターリング記念図書館

Burmese の改訂版として準備中の Beginning Burmese を教科書とし、主として文法的事項については言語学者の D. Haigh Roop 氏が、発音をビルマ婦人の Daw Tin Tin さんが分担して教えます。毎朝 2 時間ずつ（金曜日は 1 時間、土曜、日曜は休み）、日本人には発音しにくい音が多いビルマ語会話を先生 2 人を相手にやりますと、正直な話非常に疲れます。それでも先生の方が熱心なのに唯一人の学生である私が怠けるわけにはゆかず、比較的熱心に勉強しているといっていよいでしょう。今年ビルマ語を習っているのは中級、上級にはいないので、私 1 人です。修士課程の 12 人は、タイ語 4 人、インドネシア語 3 人、タガログ語 3 人、ヴェトナム語 2 人に分かれています。

私はこの他に、地理学科の気候学と、学部学生的一般教養にあたる地質学序論を選択していますので、4 科目で週 18 時間になり、大学院学生の平均は週 8～12 時間ですから、かなり負担過剰の傾向があります。

エール大学の図書館 Sterling Memorial Library は蔵書 400 万冊以上、アメリカ第 6 位の大図書館です。東南アジア関係では特にビルマとインドネシアの

文献が豊富だといわれ、ビルマ語、タイ語の本が数千冊はあるそうです。中国語、日本語の東南アジア関係の文献は、戦前のものが比較的揃っているようで、一部は文献目録として HRAF から出版されていることはご承知の通りです。また図書館に Asian Reading Room と呼ぶ、中国語、日本語を中心とするアジア諸国語の図書を専門におさめた部屋があり、Siam Rath (バンコク)、The Guardian (ラングーン)、Saigon Daily News (サイゴン)、Straits Times (シンガポール)、Indonesian Observer (ジャカルタ)などの、英語、現地語、中国語の新聞や、幾つかの雑誌が読めるようになっています。ただし、1 カ月から 4 カ月近くおくれて到着しているのは、仕方がないことでしょう。

また、同じく図書館の中の一室に Human Relations Area Files が置かれています。HRAF の本部は大学の中心からは 3 キロほど離れたところに移転しました。20 人ほどのスタッフの中には去年の 2 月に京都大学に来た Dorothy Murphy さんもいて、毎日仕事をしています。

IFEL では中国語、日本語などの授業がおこなわれていますが、中国語のクラスには 15 人ほどの学生の他に、軍の委託学生でしょうか若い制服の軍人が 100 人以上いるそうです。地理学科の建物にはやはりその関係の事務室が同居しています。こうした点はわれわれにはきわめて奇異に感じられますが、アメリカとしては当然のことなのかも知れません。全学共同利用の Language Laboratory には各国語のテープが用意されていて、150 人くらいがそれぞれフランス語、スペイン語など自分の希望のテープを別々に聞くことができるようになっています。私もたまにビルマ語の発音の練習に利用しています。

Peabody Museum には恐龍の骨格やアメリカ・インディアン関係の収集品の他、東南アジア関係の民俗資料が展示されており、新しいものとして Pospisil 氏の西イリアン Kapauk Papuan のものもあるようです。美術館や稀覯本図書館をはじめ、これだけ立派な博物館を持つなど、羨ましい限りです。

Southeast Asia Studies では月に 1 回くらいのわりの公開講演会を開いています。去年の 10 月から 12 月までの間に、インドネシアの国連大使 L.N. Palar 氏の「インドネシアとマレーシアの対決」、フィリピン

大学学長 Carlos P. Romulo 氏の「フィリピンと東南アジア」、マレーシアの国連大使 Radhakrishna Ramani 氏の「話題の焦点マレーシア」、前ホワイトハウス補佐官 E.G. Lansdale 氏の「南ヴェトナムにおけるアメリカの役割」、キャンベラのオーストラリア国立大学 A.H. Johns 氏の「現代インドネシア文学の諸相」が講演されました。はじめの4回は政治学科との共催、最後のは東および南アジア言語文学学科との共催です。後の2回は都合がつかず聞きませんでした。聴講者は教授、学生を中心に150人~200人、最初 Pelzer 氏が紹介し（ついでながら Pelzer 氏は3人の講師とは旧知の間柄、いずれも戦前にそれぞれの国で会っているそうです）、1時間半ほど講演がおこなわれた後、質疑応答がありました。現在の政治の焦点が論題であれば関心が強いのは当然で、第1回、第3回ともなかなか鋭い質問が寄せられました。Palar 氏、Ramani 氏いずれの場合もまことに熱弁をふるっていましたが、さすがに外交官らしく、肝心要めの問題は語るのを避けていたように思われるのは、若干

物足りない感じを与えました。

こうした講演会でも感じるのですが、講師にしても聴講者にしても各国の人がいて、大学というものはヨーロッパでもアメリカでも著しく国際的であることを特徴とするとは、よくいわれます。学生にしても、エールには外国人学生が627人いて、対全学生数の比率は7.5%であると、去年の統計に見えています。大学院だけを考えれば、比率がさらに高まることはいうまでもありません。私が住む大学院の寮 Hall of Graduate Studie にも、ヨーロッパ、中南米諸国はもちろん、インドやアフリカからの学生がたくさんいます。もっとも、International Studies を専攻する外国人学生はきわめて少ないようです。

図書館には読みたい本が多いし、講義も興味深いものがあるのですが、今もって言葉が自由に操れないというらみがあり、現在選択しているコースの準備だけで手いっぱいというのが実情です。残念ですが仕方ありません。それでもあと半年なんとか努力を続けたいと思っています。

